

No. 1107

国策に埋まる海

— 沖繩・金武湾 —

沖繩本島東海岸金武湾。ここに点在する与那城村平安座島、宮城島の二つの離島は、海中道路と埋立てにより陸続きとなった離島苦の解消、人口過疎化対策失業者対策として県や村が昭和41年にガルフ石油基地を誘致し、昭和47年に平安座宮城島間を埋立てて、原油備蓄基地（CTS）を建設するためであった。そして、それは現在45日分しかない原油の備蓄を60日分に増やし、金武湾に一大コンビナートを建設しようとする日本の国策でもあった。

沖繩本島とのかけ橋は島の住民の100年の願いといわれた。

今、そのかけ橋となった海中道路のためにできた石油精製工場や埋立てで島の住民や金武湾沿岸漁民が失ったものはあまりにも多大であった。

石油精製工場は原油流出事故をくり返し亜硫酸ガスの雨をまきちらした。昨年9月、平安座島では、農作物が全滅した。

「葉野菜類は全滅した。こわくて誰れも食べようとせず、くさらしてしまっただ。500坪以上にも及ぶと思う」

金武湾は、復帰前、琉球政府立与勝海上公園であり、更に浅瀬とさんごしょうに恵まれた絶好の漁場であった。

この沖繩でも有数の漁場も原油流出事故や乱開発による潮流変化の影響で魚はほとんどとれなくなった。漁民は、屋良県知事を相手どって埋立ては漁業権放棄がなされてなく無効であると裁判斗争にもちこんだ。

影響は更に拡がり、かって金武湾を流れた潮流が再び黒潮と合流する附近の津堅島にまで及んだ。追いうちをかけるように島の両側を通るタンカーはめっきり増え、島の海岸には無数のオイルボールが漂着し、沿岸漁業はかいめつ的な打撃を受けた。島の若者達も海が恋しくUターンしてくるものの、漁業ができず、又そのうちに島を離れていくという。

金武湾、中城湾一帯にコンビナートができれば沿岸漁民は完全に失業だ。

限りない沖繩の自然破壊、海殺しは、失業者対策どころか自らの生活破壊を招くものとして48年3月沿岸漁民や、農民、島の住民を中心に金武湾を守る会を結成。連日、斗争小屋に集まり、あるべき沖繩の姿が論じられた。

この沖繩の現実を知ってもらおうと東京集会でも訴えた。

「我々は高度経済成長のための沖繩の格差是正の豊かさより、公害のないつつましい豊かさを、大規模企業開発より住民のための開発を、海の埋立てより、第一次産業の振興を望むものであります。

水島の事故は住民の棄民する砂漠の海を我々に教えております。腹が痛めば全身が痛むが如く瀬戸内海の痛みは全国の痛みであります。瀬戸内海の汚染は、日本民族全体の心の汚染を全世界にさらけだした恥の歴史だと私は思います。」

今、金武湾から白砂が消えた。さんごも死んだ。

日本の国策を背負って消えていこうとする海が、沖繩にもある。